

「伝安閑天皇陵出土ガラス碗」再発見の経緯と

東京国立博物館への収蔵について

——加藤三之雄教授（第二代社会学部長）の関与——

徳田 誠 志

一・並べられた二口のガラス碗

今年（令和元年）一〇月、東京国立博物館において「御即位記念特別展 正倉院の世界 —— 皇室が守り伝えた美 ——」と題した展示会が開催された。この展示会においては、今回のお代替りを記念して正倉院宝物の優品が、東京国立博物館所管の法隆寺献納宝物などと一堂に展示された。同時期に奈良国立博物館においても、毎秋恒例の「正倉院展」が開催されており、本年はより多くの人々が天平の美術品に触れる機会となった。

さて、東京国立博物館における展示の後半、二口のガラス碗が同じ展示室の、数メートルしか離れていない場所に並べて展示された（写真1）。観覧者の多くが、このよく似たガラス碗の輝きに、改めて目を見張った。そしてまた、この二つのガラス碗が同時に、しかも並べて展示され、一般の人々の目に触れる機会は史上初めてのことであった（東京国立博物

館に正倉院宝物のガラス碗が出陳されるのは、昭和三十四年・五十六年に続いて三回目）。

ついではこの機会に、安閑天皇陵出土と伝えられるガラス碗について、江戸時代に出土してから今日までの状況を整理しておきたい。そしてまた、このガラス碗が戦後個人宅で再発見されてから、東京国立博物館に収蔵されるにあたって、本学社会学部の第二代学部長である加藤三之雄教授と「クラブ関西」が深く関与しており、その経緯についてもまとめておくこととしたい。

なお、本品の名称であるが、両者とも「白瑠璃碗」が正式な登録名称であるが、文献によっては他の名称で呼称されている場合もあるので、今回は「ガラス碗」で統一して表記する。

それでは図録の記述や他の紹介文によって、各ガラス碗を紹介していく（東京国立博物館二〇一九）。まず伝安閑天皇陵出土ガラス碗については、次のように記されている。



写真1 「御即位記念特別展 正倉院の世界 ―皇室が守り伝えた美―」 ガラス碗展示状況
(宮内庁正倉院事務所提供)

「重要文化財 白瑠璃碗」(伝安閑天皇陵出土) 口径一二・一センチ、
高八・二センチ

ササン朝ペルシア領域で製作された、アルカリ石灰ガラス製のカットガラス。正倉院宝物のガラス碗と比較すると、切子が円文になっているところが多い。また、重さは正倉院宝物が四八五グラムに対し、本品は四〇九・二グラムであり、接合しているとはいえ軽い。

その他、全体は一〇片に割れているものを漆によって接着している。この漆による接合は、江戸時代になされたものと考えられている。

続いて、正倉院宝物のガラス碗については、次のように記されている。

「正倉院宝物 中倉六八 白瑠璃碗」口径一二・〇センチ、高八・五センチ

表面全体に円形切子を施したガラス碗であり、円形切子の数は八〇個を数える。この数値は、伝安閑天皇陵出土ガラス碗と同数である。しかし正倉院宝物のガラス碗の方が切子が相接しているため、亀甲繁文のような形となっている。また、器には厚みがあり、このことが重さの違いを示しているといえよう。

本品に類似したガラス碗は、イラン・イラク地域を中心に出土しており、中央アジアや中国の遺跡においても類例が認められることから、当時、交易品として広く流通していたことがうかがわれる。

以上の通り、この二口のガラス碗が大きさも、施文方法もまったくといっていいほど類似しており、それゆえ同じ時期に、同じ場所で製作されたのであろうという想定を可能にしている。その時期と場所についての最大公約数的な記述をすれば、図録にもあるように「六世紀 ササン

朝ペルシア産」となる。

近年、このガラス碗についての考古学的な研究も多数発表されているが（巽二〇一三）、小稿ではこのガラス碗の製作時期・製作地については、専門でもないでこの最大公約数的な記述に留めておきたい。

二. 伝安閑天皇陵出土のガラス碗再発見の経緯

東京国立博物館に収蔵されているガラス碗は、一九五〇（昭和二十五）年に大阪の個人宅で再発見された後、寄贈されたものである。本節では、この再発見直後から数年の間に発表された諸先学の論文を見ながら、その経緯と論点をまとめておきたい。

実際に発見に関わった研究者と、数ヶ月の内に実物のガラス碗を調査した人物としては、「石田茂作」・「藤澤一夫」・「梅原末治」の三名であり、各自が次の論考を発表している。

石田茂作

文献①「西琳寺白瑠璃碗」『考古学雑誌』第三六巻第四号

昭和二十五年十一月

※前号に「西琳寺白瑠璃碗」として口絵の写真が掲載されており、学会誌にはじめて紹介されたものとしては、『考古学雑誌』第三六巻第

三号 昭和二十五年九月である。

文献②「西琳寺旧蔵の白瑠璃碗に就いて」『大和文華』第五号

昭和二十七年三月

藤澤一夫

文献③「安閑天皇陵発見の白瑠璃碗」『史迹と美術』二〇七号

昭和二十五年十一月

文献④「安閑天皇陵出土 玻璃碗の驚異」『あしかび』第一集

昭和二十六年四月

梅原末治

文献⑤「安閑陵出土の玻璃碗に就いて」『史迹と美術』二〇九号

昭和二十六年二月

この五本の論文がガラス碗再発見直後に発表された論文であり、その後、東京国立博物館に収蔵されてからは次の論文が発表されている。

原田淑人

文献⑥「新収品・切子のガラス器」『ミュージアム』五号

昭和二十六年八月

文献⑦「白瑠璃碗」『ミュージアム』五〇号

昭和三十年五月

文献⑧「治療してはならない傷痕 安閑陵ガラス碗の場合」

『国立博物館ニュース』第一五三号

昭和三十五年二月

文献⑨「忘れることのできない二つの資料」

『国立博物館ニュース』第二九七号

昭和四十七年二月

文献⑩「白瑠璃碗の再会」『ミュージアム』一四〇号

昭和三十七年十一月

それでは第一発見者である石田茂作氏の文献①によりながら、再発見の経緯を見ていきたい。

新聞社で開催された講演会に来阪した石田氏のもとへ、大阪府布施に在住する人物がこのガラス碗を持ち込んだことがすべての始まりである。もちろんその前に、この日石田氏が来阪されるので、当日持参して鑑定してもらうように仲介した人物がいるのだが、それは次節で詳述することとする。

文献①に記された石田氏の記述は臨場感にあふれており、再発見されたときの感情がそのまま表現された文章となっている。風呂敷包みが解かれ、その中から「しふく」に包まれた黒漆塗りの円筒形容器が取り出される。その蓋表には「御鉢」と金蒔絵で記されている。裏面には同じく金蒔絵にて、次のような記述がある。

「寛政八年三月 良辰奉 長吏宮仰書銘 弘法大師御流入木道四十二世 書博士 加茂保考 印」

さらにこの円筒形容器を納めた外箱の裏底面には、次のような記述があった。

「神谷家 九代 源左エ門 正峯 西琳寺寄進」

この記述を見た石田氏は、このガラス碗こそが江戸時代に古市西琳寺に寄贈され、その当時の識者の話題に上り、様々な記録が残されたガラス碗であること。そしてその後、幕末から明治維新の混乱期に行方不明となっていたものであることを看破されたものである(写真2)。この日の講演会が「河内郷土文化研究会」主催の「飛鳥時代と河内西琳寺」との演題であったことから、この日集まっていた人々が、この再発見という奇縁に歓喜する様子が伝わってくる。

石田氏はこの発見の経緯を記したあと、正倉院宝物のガラス碗との比

較検討を行ない、両者がよく似ていることに言及する。さらに『河内名所図会』の記載から、安閑天皇陵から出土した時期を「享保年間(一七二〇)」と想定した。

最後に安閑天皇陵から出土したガラス碗と正倉院のガラス碗の時期差をどのように考えるべきかという問題提起を行なって、稿を閉じている。

その後、藤澤一夫氏が文献③を公表する。この論文によると藤澤氏は講演会の翌日(十三日)に「河内郷土文化研究会」の席上にてガラス碗を実見し、翌々日(十五日)には所蔵者宅を訪れて実測図の作成と写真撮影を行なったとある。そして

この論文において、はじめて実測図が公表された。藤澤氏は精緻な観察の結果に基づき、後述するように藤貞幹の記述した記録の間違いを指摘する。そして石田氏の指摘した正倉院宝物のガラス碗との「時期差」については、正倉院宝物の「伝世」を考慮すべきであることを述べる。本論文の最後に、執筆した日付が記されており、その日付は「昭和二十五年八月二十八日」である。いかに実見から、実測図作成、原稿の執筆が短期間に



写真2 伝安閑天皇陵出土ガラス碗 外箱(文献①より転載)

行なわれたかがわかる。

続いて、梅原末治氏が文献⑤を発表する。この論文によれば、梅原氏は九月十日にガラス碗を実見している。この中で梅原氏はその出土時期を松下見林著『前王廟陵記』の次の記述により、「享保年間」から、今少し遡り、「元禄年間」であることを論述する。

「或曰。今高屋村城山。是也。明應中。畠山尚慶築城。或曰。近年土民発掘陵。得古代器物等。」

この『前王廟陵記』の刊行年は元禄九（一六九六）年であり、この記事にある地元民が発掘して出土品を得たという記述のとおり、ガラス碗はこの時に出土した可能性が高いことを論じている。

梅原氏は九月に実見した際に、所蔵者からこのガラス碗を借用したようであり、十月二十六日に正倉院において正倉院宝物であるガラス碗と、この日持参した安閑天皇陵出土ガラス碗を庫内に並べて比較したことを記す。この時の立会者は、梅原氏の他は国立博物館関係者、正倉院関係者、さらに先の藤澤氏などごく限られた人員であったと思われるが、その場に立ち会った一同全員が、この瓜二つのガラス碗の前に感激したことを記述する。例えば文献⑩を著わした蔵田氏は、昭和三十四年に二口の碗が東京国立博物館で二度目の対面を果たした際の記述において、この昭和二十五年十月のはじめて両碗が並んだときの感想を、次のように記す。

「宝庫中倉において赤絨毯の上に両者を並べておかれたときの感激は今もなお新鮮であり、一種異様な興奮にとらわれた一瞬であった。」

梅原氏も当時の正倉院所長であった和田軍一氏が「姉妹の器が長い年月

を経てあひ会ふたものだとしてあかず眺めていた。」と記す。

冒頭に記したように、ごく限られた研究者のみが両碗を一度に観察する機会があったものの、今秋の展示会においては、史上初めて一般の人々もこの「姉妹の器」を同時に鑑賞することができた。このような機会が、次はいつ訪れるのであろうか。

さて梅原氏は、石田氏の指摘した両碗の「時間差」について、古墳から出土する青銅鏡においても数百年の「伝世」が珍しくないことを自らの調査例を提示し、さらに正倉院宝物にも伝世したものが存在することを指摘する。そしてこの二口のガラス碗は、六世紀にわが国にもたらされたものであり、そのうち一口が安閑天皇陵に副葬され、もう一口は古墳に埋納されることなく地上にあり、どこで伝世していたかは定かではないものの、その後、正倉院宝物に加わったと考えるべきであることを述べる。すなわち、藤澤氏と同意見を提示された。

その後石田氏は文献②において、安閑天皇陵への副葬が崩御と同時期ではなく、百年祭二百年祭等における埋納も考慮すべきとの反論を記す。すなわちこのガラス碗がわが国に将来した時期を、六世紀に限定することはできないと論述する。この点については出土状況が明確でなく水掛け論になるため検証しようがないが、近年では正倉院宝物に加えられた時期が、八世紀ではないという可能性も提示されていることを付記しておきたい（由水二〇〇九）。

そして梅原論文の最後には、次のような一文で締めくくられている。

「最近永久保存のために国立博物館に寄贈されたことを書き添え得るのは、私の喜びとするものであります。」

この文章が記された日付は「十二月二十八日」であり、後述するように東京国立博物館の記録では「十二月二十七日」に東京国立博物館が受領したとある。

以上が直接ガラス碗の再発見に関わった三名による論文であり、昭和二十五年八月の再発見から四ヶ月あまりで、東京国立博物館に収蔵されたことがわかる。

東京国立博物館に収蔵された後は、原田淑人氏が文献⑥・⑦・⑧・⑨を著わす。そのうち文献⑥では、その文末に伝安閑天皇陵出土ガラス碗が東京国立博物館に収蔵されたことについて次のように記す。

「遠いシベリヤから久々で帰還したわが子に対する母親の心情をもつてこれを歓迎したのである。」

このようにまさにこの時代の世相を反映した表現によって、収蔵されたことの喜びを表現している。そして原田氏は晩年に至るまでこのガラス碗に対して思い入れが深かったようであり、二〇年以上を経た文献⑨においても、東京国立博物館に収蔵されたことを感慨深く回想している。

三、出土地とされる安閑天皇陵について

続いてガラス碗が江戸時代の、一七世紀末から一八世紀初頭にかけての頃に出土したと伝えられる、安閑天皇陵についてまとめておきたい。

安閑天皇「古市高屋丘陵」は、大阪府羽曳野市古市五丁目所在する。陵墓は現在も皇室ご祖先のお墓として祭祀が続けられており、尊厳と静安を保持するという観点から一定区域以外の立ち入りはご遠慮いただきたい。

ているところである。しかしながら、適切な保全のために保護工事等を実施する際には事前に考古学的な調査を実施しており、本陵も平成四（一九九二）年十一月から十二月にかけて護岸工事に先立つ調査が実施された。これらの調査記録などをもとに、現在の安閑天皇陵における墳丘や出土遺物についての考古学的な観察結果を述べていきたい。

そのまゝに、まずは安閑天皇陵について、治定に係る文献記録を見ておこう。安閑天皇の陵については『記紀』及び『延喜式』に次のように記されている。

『日本書紀』

「二年冬十二月癸酉朔己丑天皇崩于勾金橋宮時年七十是月葬天皇于河内舊市高屋丘陵」

『古事記』

「御陵在河内之古市高屋村也」

『延喜式』

「古市高屋丘陵 勾金橋宮御于安閑天皇在河内國古市郡兆域東西一町南北一町五段陵戸一烟守戸二烟」

このようにいずれの記録においても「高屋」という地名が記されており、この場所は現在の「大阪府羽曳野市高屋」に比定される。そしてその場所は、石川左岸にある標高三〇から四〇m、南北約一キロ、東西約五〇〇メートルに広がるいわゆる「高屋丘陵」にまちがいない。現在は住宅が建ち並びよく分らないが、戦後すぐの航空写真を見ると、独立した丘陵の形がよく分る（写真3）。そしてこの丘陵全体を利用して「高屋城」が築かれている。この高屋城の本丸部分が現在の安閑天皇陵であり、

墳丘測量図を見ても明らかなように、城郭として利用されていた痕跡をよく残す。このように文献史料に依拠する限り、安閑天皇陵の治定場所については現在地以外には考え難いことになる。

なお、高屋城について触れておくと、地元自治体による発掘調査等の結果（羽曳野市一九九七）、本城は応仁の乱（一四六七年）直後に築造され、その後畠山氏が居城とする期間が長いが、天正三（一五七五）年の「高屋城の戦い」と称される織田信長との合戦により開城し、以後廃絶したと考えられている。

その後、城郭に利用された墳丘には大きな改変はなされず、今日まで保たれてきており、ガラス碗が出土したという一七世紀末から一八世紀にかけての状況と、今日の墳丘形状は大きく異なるものではないと考えられる。

それでは第1図に示した、近年、航空レーザー測量によって作成された墳丘測量図を見ながら、墳丘を観察していこう（古市古墳群世界文化遺産登録推進連絡会議二〇一五）。大きさはあくまでも水面上にある見かけの数値であるが、墳丘長一二二メートル、後円部径七八メートル、前方部幅一〇〇メートル、高さ一二・五メートルを測り、後円部が現状では五〇センチほど高い。墳丘主軸はほぼ東西を示し、前方部南西隅と後円部南側に渡土堤が設けられている。この渡土堤は少なくとも築造当初に遡るものではなく、墳丘の改変時において設置されたものと考えられる。

墳丘の北側は図面からもわかるとおり、後円部から前方部にかけて墳頂から周濠まで急傾斜をなしており、くびれ部付近にある斜面の途中には平坦面が認められる。これも古墳に伴うものではなく、城郭遺構の一



第1図 安閑天皇陵航空レーザ測量図（文献古市古墳群2015より転載）



写真3 高屋丘陵航空写真

部であると考えられる。南側は墳頂直下が少し傾斜が強く、その後は周濠までなだらかに下っていく。

内部構造については、かつて横穴式石室が存在する可能性が指摘されているが、現状では報告された空洞を確認することはできず、石室に用いられたと思われるような石材も確認できない（末永一九七五）。よって、内部施設は不明としかいえないのが現状である。

続いて、平成四年に実施した調査の出土品を見ていきたい（宮内庁書陵部一九九四）。この調査は墳丘護岸工事に伴う調査であったため、トレンチは墳丘最下部から周濠にかけて設定されている。そして周濠はオープンな状態が長く続いていたことから、様々な時期の遺物が出土した。古墳に伴う遺物としては、円筒埴輪や朝顔形埴輪の破片がある。埴輪の特徴は粗い縦方向のハケメ調整や突出度の低い突帯の形状から、円筒埴輪でも新しい時期に属すると考えられる。他に古墳時代に属する遺物としては、須恵器（坏・高坏・甕等）が出土している。いずれも小片であり全形を知りうる個体はないが、坏身の受け部の形状から六世紀代に位置付けることが可能とされる。すなわち埴輪の示す時期と一致しており、本陵築造期を示す遺物であると考えられる。

このように本陵は出土遺物の示す年代や、墳丘は大きく改変されているものの古市古墳群内の立地状況から考えて六世紀前半の築造が想定されている。よって、安閑天皇の崩御年と大きく違わないこととなる。

それではガラス碗が出土した場所が特定できるかということであるが、結論的には不明といわざるを得ない。墳丘の観察でも述べたように、古墳本来の形状は城郭に利用された際に大きく改変されており、段築状況

も不明なほどである。内部施設の位置や形状も明らかではなく、大雨によって墳丘が崩落した際に出土したとも伝えられるが、そのような痕跡を示す場所も特定できない。

城郭に利用された際に改変がなされている事実と、『前王廟陵記』の記述を信じる限り、ガラス碗は内部施設そのものから出土した可能性は低く、すでに改変によって副葬時の原位置からは離れた場所から出土したと考えられる。しかしながら今日、その場所を特定することはできない。

但し、安閑天皇陵として治定されている場所は、元禄一〇（一六九七）年から二年間を費やして実施された陵墓の探索と修陵時から今日まで一貫して現在地であり、ガラス碗の出土地が現在の安閑天皇陵であることは確かであろう。このことは、ガラス碗が収められた外箱の記載、すなわち神谷家（安閑天皇陵所在地の所有者）が所持しており、西琳寺に寄贈したという記載ともまったく矛盾しないものである。

四．「クラブ関西」による寄贈の経緯と加藤三之雄教授の関与

前節でも述べたように、安閑天皇陵出土ガラス碗が再発見された日は、昭和二十五年八月十二日である。そしてこの講演会を主催した人物である加藤三之雄氏こそが、このガラス碗の再発見から、その後東京国立博物館に収蔵されることとなるシナリオを練った人物である。

本節では加藤三之雄氏と、ガラス碗を買い上げて東京国立博物館へ寄贈した「クラブ関西」についてまとめていく。それではまず、加藤氏の略歴を記していきたい（写真4）。



写真4 加藤三之雄教授肖像写真（関西大学
年史編集部提供）

加藤氏は明治三十四（一九〇二）年、名古屋市生まれ。第八高等学校を経て、大正十三（一九二四）年、東京帝国大学経済学部卒業。同年、毎日新聞社、入社。第二次世界大戦中にベルリン支局長を勤め、戦中、戦後の混乱を乗り切って帰国する。戦後は、同社大阪本社編集局次長、総務局長、論説副委員長、常勤監査役を歴任し、昭和三十一年に退社。その後、昭和三十三年（一九五八）年に関西大学文学部に招かれ講師となり、翌年教授に就任。その後昭和四十三年十月からは、創設されたばかりの社会学部に転籍し、第二代の学部長の重責を担われた。その間、昭和三十一年から同三十九年までは、大阪府教育委員を務められる。その間係もあってか、昭和四十六年に関西大学を退職された後、昭和四十七年から同六十一年まで、財団法人大阪文化財センター（現、公益財団法人大阪府文化財センター）の理事長に就任される。そして昭和六十二年

十二月に八六歳で逝去された。

このようにマスコミ界において活躍された後、大阪の教育や文化行政に大きな足跡を残している。この経歴からガラス碗の発見された昭和二十五年当時は、毎日新聞社総務局長の職にあったことがわかる。

さて、ガラス碗の再発見から東京国立博物館に収蔵される経緯については、加藤氏自身が詳しく書き記した文章があるので、それに従って記述を進めていきたい（加藤一九七八b）。

ガラス碗の存在を最初に探り当てた人物は、毎日新聞総務局に所属していた「蓬郷峯保」という記者であった。彼は京都大学文学部で歴史を学んだ人物であり、その卒業論文作成の過程でガラス碗の所蔵者「行松勢二」氏と知り合う。そして蓬郷氏の情報を受けて、行松氏にガラス碗の鑑定を石田氏に依頼すべく、八月十二日に持参するように仲介した人物が加藤氏ということになる。発見以降の経緯と調査はすでに述べたところであるが、加藤氏も十月になされた正倉院における二口のガラス碗対面にも立ち会っており、このことは同月二十九日に毎日新聞紙上に報道された。

このような中、加藤氏が最も気がかりであったことは、ガラス碗の行方である。この点を、加藤氏の文章から紹介しておきたい。

「図らずも出現した「玉碗」を万が一にも再び喪失することのないよう保管に万全を期するにはいかにすべきか、という命題であった。」そしてこの命題の答として、加藤氏が出した結論が、次の文章である。

「遠くとも東京国立博物館に納めて保管してもらうのが一番万全の策ではないか。」

このように加藤氏が考えた理由としては、所蔵者である行松氏が、ガラス碗の評価が高まるにつれ売却をほめかすようになっていたということとを、蓬郷氏から聞き及んでいたことであろう。売却となれば終戦もない日本から流出してしまう可能性もあり、あるいはまたどこかの個人宅に秘蔵されてしまうことも考えられた。このような状況の中、東京国立博物館に納めることが最善であったとしても、どうやって資金を調達して行松氏からガラス碗を譲り受けるかという最大の問題があった。そこで加藤氏が考えた方法が「クラブ関西」

に買い上げてもらい、東京国立博物館へ寄贈するという手段であった。

それでは続いて、この「クラブ関西」を紹介しておきたい。「クラブ関西」は終戦後荒廃した大阪にあって、公職追放を受けた経営者に代わる若手経済人の集まりとして、昭和二十三年五月に社団法人として設立された（写

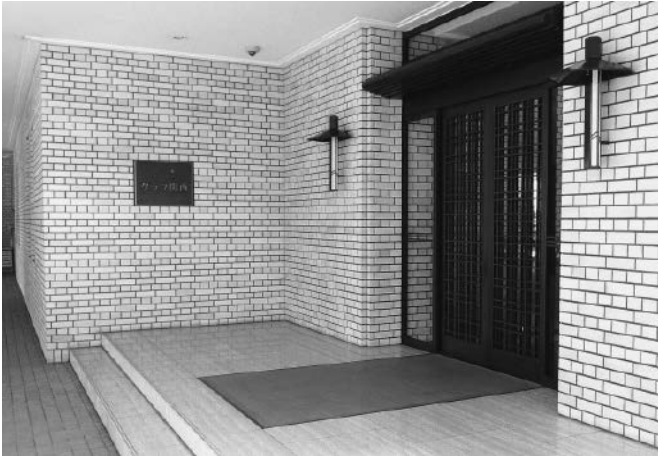


写真5 現在の「クラブ関西」玄関

真5)。爾来、七〇年にわたって関西経済の復興と発展、さらには社会の発展と次世代の人材育成に取り組んでいる団体である（現在の理事長は、加藤好文 京阪ホールディングス株式会社代表取締役会長）。

この「クラブ関西」の初代事務局長を務めた小島威彦氏と加藤三之雄氏が戦前から旧知の間柄にあったために、先の手段を思いつかれたものと思われる。加藤氏の言葉を借りれば、次のようになる（加藤一九七八 a）

「私としてはこのクラブの「文化の寄与」という触れこみに拠りかかって、一つだけ良いことをした。」

この文章にある「一つだけ良いこと」というのが、「クラブ関西」が資金を調達してガラス碗を購入し、東京国立博物館に寄贈したという事実である。

この経緯を、現在クラブに残されている資料から裏付けていくこととしよう。写真6に示した「お知らせ」と題した文書である。日付は「昭和二十五年十一月三十日」であり、発信者は理事長「成瀬達」名である。その文章は、次のとおりである。

「本日理事会に於て文化事業の一端として左記日本最古のガラス容器を当クラブにて買受け東京国立博物館に寄贈し以て我が国文化史上特に考古学上重要な名器保存を計ることに決定致しました。就而は右買取り代金拾五萬圓也を加入会社五十四社に於て各貳仟八百圓の特別御負担のこととし乍勝手本月分御勘定にて御請求申し上げますので併せ御承認下さいます様御願い傍御通知致します」

すなわちガラス碗を一五万円で購入するので、クラブに加盟する五四

の会社がそれぞれ二八〇〇円を拠出するようにとの通知である。当時の物価において比較すると、昭和二十五年の銀行員大卒初任給が三千円であることから、現在の初任給が二〇万円とするならば、六六・六倍となり、一五万円は約一千万円となる。この時の理事会における議事録は残されていないようなので、どのような議論があったのかは定かではない。しかし加藤氏がいうように「大阪の財力をもって文化の復興あるいは興隆をはかる」という、クラブ発足時の目的を具現化した活動であったと位置付けられる。

このおそらくは加藤氏が書いたシナリオに従って、ことは極めてスムーズに進んだようであり、写真7に示したとおり「昭和二十五年十二月

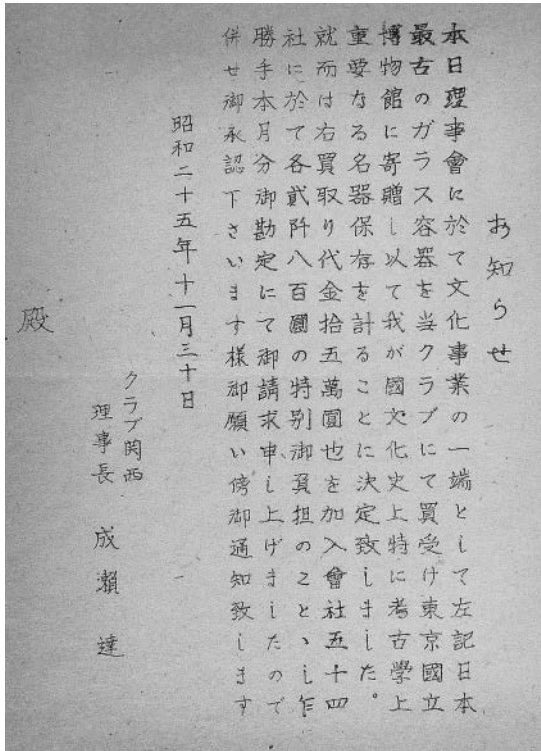


写真6 クラブ関西理事長 成瀬 達「お知らせ」

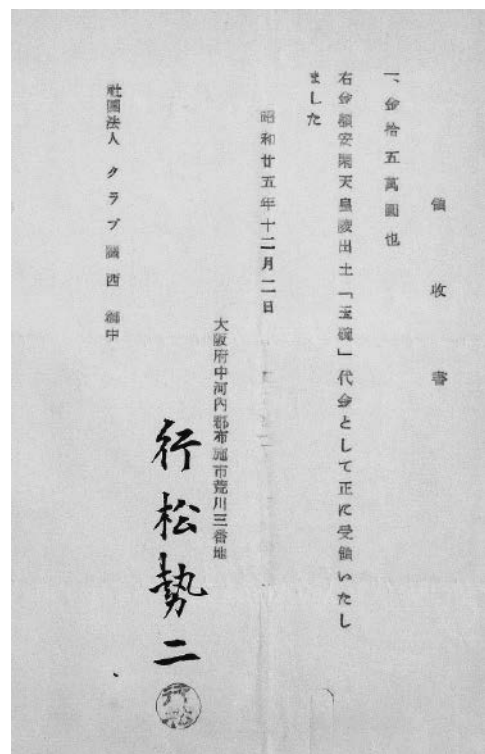


写真7 行松勢二「領収書」

二日」付けて「行松勢二」自筆の領収書が、現在もきちんと「クラブ関西」に残されている。その金額は、確かに「金拾五萬圓也」とある。その後、東京国立博物館の台帳によれば「十二月二十七日」に受入れが完了しており、八月十二日の再発見から四ヶ月ほどで、ガラス碗は安住の地に収まったことになる。当時の世相と現在を比べようもないが、今の貨幣価値に換算して一千万円という資金を調達して、わずかな期間で最善の策を完了させた加藤氏の手腕（豪腕？）は特筆されるべきであろう。もちろん、このシナリオを実行された「クラブ関西」の決断は、大いに賞賛されるべきものである。令和の御即位記念に二口のガラス碗が並べて展示された僥倖を改めて実感する。

東京国立博物館からは、翌年三月二十三日付で館長「浅野長武」から、

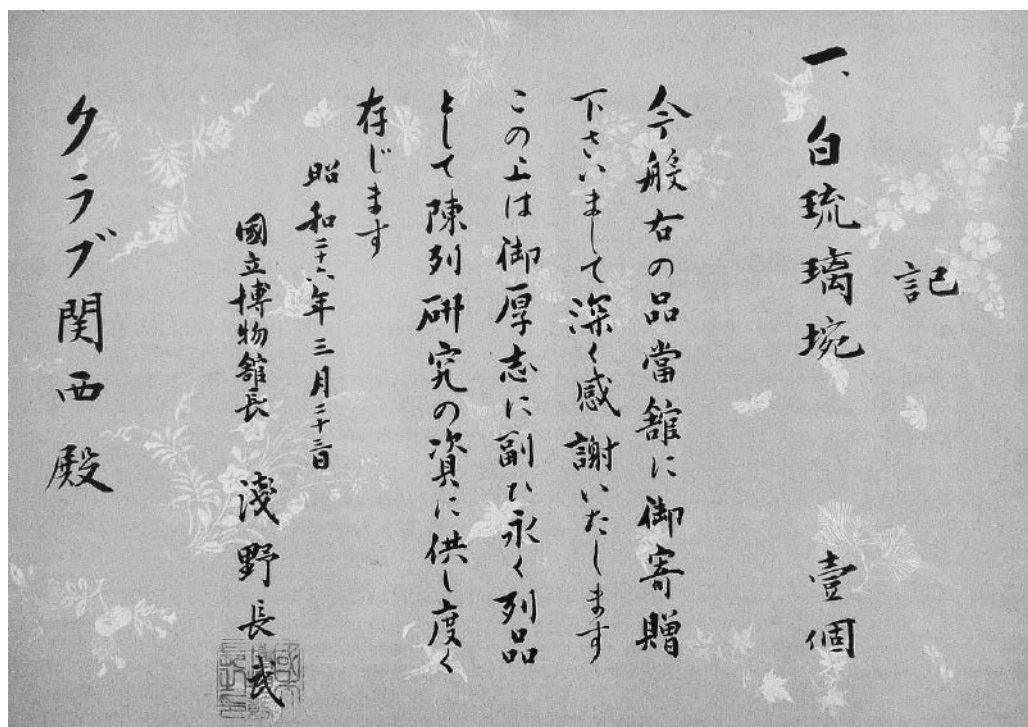


写真 8 東京国立博物館発行「感謝状」

クラブ関西宛の感謝状が贈られている（写真8）。

五、伝安閑天皇陵出土ガラス碗についての江戸時代記録について

これまで伝安閑天皇陵出土ガラス碗について、再発見と出土地、さらには東京国立博物館への收藏経過を見てきた。本節では、江戸時代はこのガラス碗が西琳寺に寄贈された当時のことについて、少し補足しておきたい。

江戸時代中期から後半にかけての十八世紀後半以降、物産学あるいは本草学と呼ばれる学問が芽生えていく。元々のきっかけとしては背景に殖産興業があり、国内の生産力をあげることを目的としている。一例を挙げると、薬用に有益な植物を収集・分類し、全国で統一した名称を確定することなど今日の植物学に通じるような活動があげられる。このような活動を牽引した人物としては、「エレキテル」を発明したことで知られている平賀源内も、本業は「本草学者」といって差し支えない。

この頃の大坂にあつては、「知の巨人」とも呼称された木村兼葭堂（一七三六―一八〇二）が活躍している。彼は今日の石器・石製品を含む「石」に特化して収集し、「石の長者」と呼ばれた木内石亭が活躍していたのもこの時期である。このような物産学の興隆は、木村兼葭堂のような市井にある人物から、寛政の改革を推し進め幕府の中心にいた松平定信が、その一線を退いたあと『集古十種』の編纂に没頭するなど、多彩な人物が関わっている。

すなわちガラス碗が西琳寺に寄贈されたことは、寛政八（一七九六）年にあつて、当時の好古家と呼ばれた人々の間で大きな話題になったことは間違いない。

改めてこのガラス碗が収められていた容器を見ると、「長吏宮御書銘」とあるように「盈仁親王」によつてガラス碗が「御鉢」と命名され、それを当代一流の書家である「加茂保孝」が揮毫している。この盈仁親王は明和元（一七六四）年に、閑院宮典仁親王（追尊天皇慶光天皇）の第七皇子として生まれた人物である。すなわち第一一九代光格天皇の同母弟であり、宮中にあつて極めて高い地位にあつた人物である。命名した当時は聖護院の門跡であり、親王に茶の指南をしていた「速水宗達」を通じて、西林寺の住職がこのガラス碗を持参し、命名してもらつたことが記録されている。すなわちこのガラス碗が世に知られた際には、天皇の弟宮から、木村兼葭堂のように市井にあつて好古の趣味を持つ人々の間まで話題になつたことが察せられる。

なお、盈仁親王は文政十三（一八三二）年に薨去し、京都市左京区北白川にある聖護院宮墓地に葬られ



写真9 盈仁親王墓（京都市左京区北白川丸山 聖護院宮墓地）

ている（写真9）

このように大きな話題となった当時、多くの好古家による記録が残るが、そのうち藤貞幹が著わした『集古図』には図面が掲載されている。しかしながら藤澤氏が指摘したように、藤貞幹の残した記述には間違いくが多く、そもそも『集古図』に掲載された図も、現物とは大きく異なっている（写真10）。この理由は、藤貞幹はガラス碗が西琳寺に寄贈された翌年に没しており、実物を自ら見ていない可能性が考えられる。そして現在国立国会図書館が所蔵する『集古図』には、次のように記されている。「右玉器圖原本多

誤故今附斯全圖以備構成云」このように記して、写真11に示した図が添えられている。この図を見ると、伝安閑天皇陵出土ガラス碗が正確に描かれていることがわかる。

それでは何の情報に基づいて、この正しい図が描かれたのであろうか。この図の原本と思われる図を『標有梅』に中に見いだすことが



写真10 『集古図』（国会図書館所蔵）所収ガラス碗 図面その1

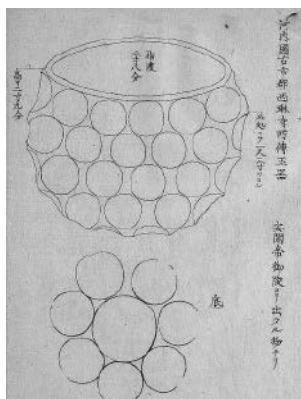


写真11 『集古図』（国会図書館所蔵）所収ガラス碗 図面その2

できたので紹介しておこう。

『標有梅』の著者は、大坂南組惣年寄を勤める家柄に生まれた野里四郎左衛門梅園（一七八四～不明）である。惣年寄という職務の傍ら、彼は狂歌や煎茶道にも造詣が深く、そして古文物に強い関心を示し、いくつかの著作を残している。その代表的な著書が、文政十一（一八二八）年に刊行された『梅園奇勝』である。そして今回のガラス碗の図は、東京都立中央図書館が加賀文庫（加賀豊三郎旧蔵資料）として所蔵する一〇冊のうちの一冊に見いだした。この図を原本とする理由は、写真12に示したように、

実物の拓本をそのまま貼り付けており、野本自身が手拓した資料であることを理由とする。この図と写真13

に示した『集古図』のガラス碗口縁の上下面図を比較してもらいたい。『標有梅』

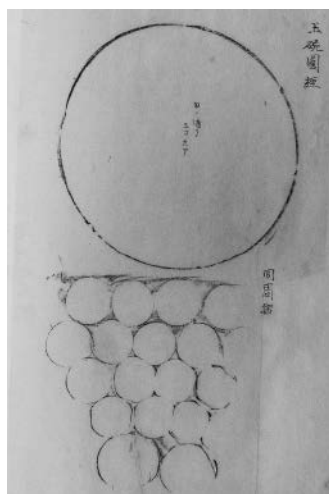


写真12 『標有梅』（東京都立図書館所蔵）所収ガラス碗 図面

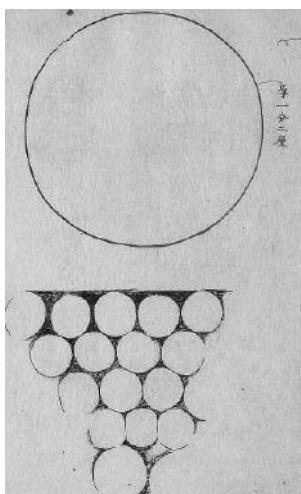


写真13 『集古図』（国会図書館所蔵）所収ガラス碗 図面

には実物の拓本が貼込まれているのに対し、『集古図』は明らかに墨描きの実線なっていることがわかる。

しかし残念ながら野里がいつガラス碗を採拓したかは、明らかにできない。なぜなら『標有梅』には作られた時期の明示はなく、おそらく野里自身が自らの勉強のために備えた覚書のようなものであって、刊行を目指したものではないと考えられるためである。よって、想定域を脱しないものであるが、野里は文政十一（一八二八）年に『梅園奇勝』を刊行しており、採拓の時期としてはおそらくその前後ではなからうか。

この『標有梅』に実際の拓本が貼り付けてあることは、再発見当時にこのガラス碗を調査した三名も言及していないことであるので、ここに付記しておくこととしたい。

六. まとめ

令和二（二〇二〇）年には、安閑天皇陵出土ガラス碗が再発見されて七〇年となる。数えてみると一七〇〇年頃現在の安閑天皇陵で出土し、およそ一〇〇年後の寛政八（一七九八）年に、西琳寺の所有となる。その際に大いに世間を賑わしたガラス碗も、七〇年あまりを経た幕末から明治維新にかけての混乱期、さらには廃仏毀釈という荒波の中で行方不明となる。その後、第二次世界大戦の終結から数年経った昭和二十五（一九五〇）年に、およそ八〇年振りに、外箱も形状も江戸時代そのままの形で再発見された。そして再発見からわずか四ヶ月という迅速さで、東京国立博物館に収蔵され、このことによってガラス碗の長い長い流転

の旅は終わりを迎えることとなった。そして、令和元年に、二口のガラス碗が御即位を記念して、東京国立博物館で展示された。

現在の安閑天皇陵からガラス碗が出土しておおよそ三〇〇年、さらにこのガラス碗が中東地域からわが国にもたらされてから一五〇〇年の時間が経過している。かつて作家井上靖氏は、このガラス碗を題材として『玉碗記』という短編小説を書き上げた（井上 一九九五）。歴史的な事実関係だけを追えば、小説の叙情的な部分は排除せざるを得ず、正倉院宝物のガラス碗が同時に将来したか否か、どこで、誰の手のもとで片方のガラス碗は伝世していたのか、そしていつ、誰の手によって正倉院に納められたかなど明らかにできない事項も多い。

未だ不明のことがあるにせよ、今回両碗がはじめて同時に展観されたことを期して、七〇年前の加藤三之雄氏の活躍と「クラブ関西」の英断を記憶しておきたい。

文献

井上靖一九九五「玉碗記」『井上靖全集』第二巻 新潮社

加藤三之雄一九七八「クラブ誕生のお手伝い」『CLUB KANSAI 30

周年記念誌』社団法人クラブ関西 30周年記念誌編集委員会

加藤三之雄一九七八「玉碗」頼末記」『羽曳野史』第三号 羽曳野市史編

纂室

宮内庁書陵部一九九四「安閑天皇古市高屋丘陵整備工事区域の調査」『書陵部

紀要』第四五号

末永雅雄一九七五「安閑天皇陵」『古墳の航空大観』学生社

巽善信二〇一三「天理参考館所蔵古代ガラスの蛍光X線分析——ササン朝系カットガラスについて——」『西アジア考古学』第一三三号 日本西アジア

考古学会

東京国立博物館二〇一九 鶴真美「93 白瑠璃碗」山本亮「94 白瑠璃碗」『御

即位記念特別展 正倉院の世界——皇室が守り伝えた美——』

羽曳野市一九九七「第5節 高屋城と城下町」『羽曳野市史』第一巻 羽曳野

市史編纂委員会編

古市古墳群世界文化遺産登録推進連絡会議二〇一五『古市古墳群測量図集

成』藤井寺市総務部世界遺産登録推進室

由水常雄二〇〇九「正倉院ガラスは何を語るか——白瑠璃碗に古代世界が見える」(中公新書二〇二五) 中央公論新社

御礼

一般社団法人「クラブ関西」ご所蔵の資料閲覧にあたっては、理事長加藤好文氏、専務理事崎本哲生氏、同事務局長松井博志氏にご高配頂いた。お名前を記し、感謝申し上げます。

協力機関

宮内庁正倉院事務所

東京都立図書館

東京国立博物館

一般社団法人クラブ関西

関西大学年史編纂室

